



展覧会概要

古筆とは古人の書という意味ですが、狭義には平安、鎌倉時代の貴族が認めた歌集などを指します。これらは室町時代後期になると、1頁ごと、あるいは数行に分割切断され、茶の湯で床を飾る掛軸や収集・鑑賞のために手鑑へと改装されました。特に、貴族趣味を反映した美しい料紙に書かれた流麗な古筆は、江戸時代の大名家でもこぞって収集されました。

徳川美術館には「重之集」、「名家集切」といった尾張徳川家伝来の平安時代の古筆から、近年寄贈を受けた「石山切」や「関戸本古今和歌集切」など、名だたる古筆を多く収蔵しています。本展では、これら古筆の名品に加え、新収蔵品 20 点をご紹介します。

展覧会基本情報

- ◆展覧会名 企画展 うるわしの古筆
- ◆会場 名古屋市蓬左文庫展示室
- ◆会期 2024年1月4日(木)～1月28日(日)
- ◆開館時間 午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- ◆休館日 月曜日(但し、1月8日(月・祝)は開館、翌1月9日(火)は休館)
- ◆観覧料 一般1,400円 高・大生800円 小・中生500円
※20名様以上の団体は一般1,200円 高大生700円 小中生400円
※毎週土曜日は高校生以下無料
- ◆主催 徳川美術館・名古屋市蓬左文庫・毎日新聞社
- ◆協力 名古屋市交通局

ご取材について

随時ご対応させていただきますので、ご希望の日時をご連絡ください。

電話：052-935-6262

メール：public-info@tokugawa.or.jp

担当：吉川・竹内

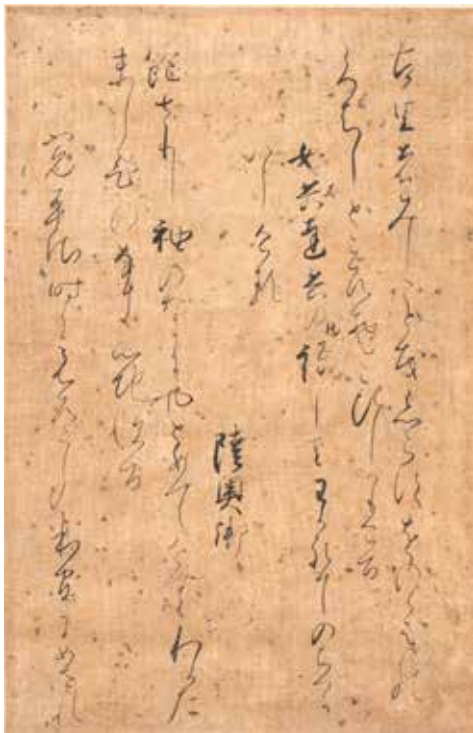
【初公開】 勅使河原順三・千代子両氏寄贈コレクション 「通切 古今和歌集」等古筆名品 20 点を新収蔵

徳川美術館ではこのたび、新たに勅使河原順三・千代子夫妻が生前に蒐集した書の名品優品のコレクション 20 点をご寄贈いただきました。

勅使河原順三氏は、医学博士で医療法人社団順正会理事長・全日本病院協会常任理事として医療に従事され、その傍ら造詣を深められた茶の湯や仏教芸術、そしてその美意識に適う古美術品に心を寄せてこられました。また千代子夫人は、表千家同門会愛知支部の役員を務められ、日頃から茶の湯に親しみ、さまざまな茶会に足を運び、自ら茶事も頻繁に催されてきました。

過去にはご所蔵の作品を徳川美術館で開催した特別展にお貸しいただいたことも幾度かあり、美術館主催の茶会にも度々ご来席賜りました。そのようなご縁もあり、ご夫妻が長年にわたり蒐集し慈しんでこられたコレクションを、地元の美術館で活用し、多くの人たちが日本の文化や美術の素晴らしさに触れる機会にしてもらえればとのご夫妻のご厚志により、このたびの運びとなりました。

ご寄贈品は「伊予切 和漢朗詠集」や「筋切 古今和歌集」「石山切 貫之集下」をはじめ「戌辰切 和漢朗詠集」「昭和切 古今和歌集」などの名だたる古筆 11 点、伏見天皇・後奈良天皇の宸翰、一山一寧の墨蹟、さらに「二月堂 焼経（紺紙銀字華嚴経）」「中尊寺経（清衡経）」「神護寺経」などの古写経 6 点、何れも勅使河原ご夫妻の高い審美眼を窺うことができる名品揃いです。



【画像 1】 通切 古今和歌集「飽さりし」

藤原定実筆

平安時代 12 世紀

『古今和歌集』を書写した上下二帖の粘葉装の断簡である。料紙の表面は、銀泥で天地に界線（筋）を引いた歌合用の料紙を、縦使いに転用しており、ここから「筋切」と呼ばれる。裏面は篩目に似た布目がついており、篩が「とおし」とも呼ばれたことから「通切」と名がつく。

筆者は藤原佐理と伝わるが、やや縦長の字形で、細身の線を用いた流麗な筆から、藤原行成の曾孫・定実の手によると推定されている。



【画像 2】 重要美術品 石山切 貫之集下

藤原定信筆

平安時代 天永 3 年 (1112) 頃

天永 3 年 3 月に白河法皇の六十賀に際して製作されたと推定されている「本願寺本三十六人家集」は、当時の能書 20 名の寄合書きで、書の優美さ、工芸技術の粋を尽した料紙の華麗さなど、王朝貴族趣味を余すところなく伝える品として知られている。「石山切」は、「本願寺本三十六人家集」のうちの「貫之集下」「伊勢集」の断簡をいい、昭和 4 年 (1929) に分割されるのに際し、本願寺がもとあった摂津の石山（現在の大阪城付近）にちなんで名付けられた。

本願寺本の「貫之集」は上下 2 帖からなっており、「石山切」として分割された下帖は、藤原行成から 5 代目の子孫にあたる藤原定信 (1088 ~ 1154) の染筆になるとみなされている。

第1章 「かな」の美 11世紀の古筆

古来、独自の文字を持っていなかった日本では、中国から渡来した漢字の音を使用して日本語を表記していたが、和歌の興隆とともに、〈かな〉(女手)が展開していった。〈かな〉は細い線、曲線、連綿(文字と文字をつなぐ線)など、日本独特の書風で表された。特に、11世紀になると、『古今和歌集』の写本である「高野切」や「関戸本古今和歌集」など、線の抑揚を抑えながら、連綿遊糸の優美な筆線で、余白との見事な調和を図った洗練された〈かな〉の美が完成したのであった。



【画像3】重要文化財
重之集 伝藤原行成筆
平安時代 11世紀

三十六歌仙の一人である源重之(生歿年未詳)の家集。重之が帯刀先生(武器を帯びて東宮の身辺および御所の警護にあたる者の長)の任にあった時、村上天皇の第2皇子憲平親王(後の冷泉天皇)に新たに詠んで献じた春・夏・秋・冬各20首、恋・恨各10首、および「かずのほかかにたてまつれる」2首をあわせて102首の歌を収めている。

淡い藍の打曇がある料紙に雲母砂子を一面に撒き、前半は歌を2行書き、後半は散らし書きにしている。緩急抑揚が自在で流麗な筆致により、書写年代は11世紀前半にさかのぼると考えられる。

第2章 世尊寺流

三蹟の1人である藤原行成(972～1027)に始まり、2代行経・3代伊房・4代定実・5代定信と続いてゆく家を世尊寺家と呼ぶ。これは鎌倉時代の8代行能が行成の菩提寺である世尊寺を家名としたことによる。宮廷の書役を務めた彼らの書は、のちに「世尊寺流」と称されるが、流派で書風が統一されているのではなく、各自が時代を先取りした書を展開したのが特徴で、11～12世紀における書の根幹となった。

第3章 多様化する〈かな〉の美 12～13世紀の古筆

12世紀に入ると、変化に富んだ個性的な〈かな〉が次々と登場する。関白・藤原忠通(1097～1164)の書は、忠通が洛東の法性寺に住したことから法性寺流と呼ばれた。その筆勢のある重厚な書は当時「今めかし(現代風)」として享受され、多くの能書たちに影響を与えながら展開していく。法性寺流の能書としては、「今城切」や国宝「源氏物語絵巻」の「竹河」「橋姫」の詞書を手掛けた藤原教長(1109～80)や、忠通の3男・九条兼実らがあり、さらに鎌倉時代の主流となった兼実の次男・後京極良経(1169～1206)の後京極流やその子・九条教家(1194～1255)の弘誓院流など、様々な書流が登場した。

また、学者として独自の書風を築き、後世にも大きな影響を与えた俊成(1114～1204)・定家(1162～1241)親子も12世紀以降の書の展開を知る上では欠かせない存在である。

第4章 中世の宸翰

宸翰は、天皇自筆の文書のことを指す。特に、鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての天皇は、格調高い書風を展開し、後世には「宸翰様(様式)」と呼ばれた。ただし、書風は一様ではなく、天皇によって様々である。

後鳥羽天皇(1180～1239)をはじめ、後深草天皇(1243～1304)、伏見天皇(1265～1317)らの書が名高く、特に伏見天皇は藤原行成ら三蹟、世尊寺流など、往古の名筆を収集して、修練したことで知られる。『増鏡』では、藤原行成を凌ぐと称された鎌倉時代屈指の能書帝であったと語られている。

第5章 古写経

仏教伝来によって公家たちは篤く仏教を信奉し、經典を多く書写した。「写経」は、『法華経』法師功德品に「読誦・解説・書写する者は大なる功德を受ける」とあるように、功德を積むという目的があった。8世紀には、国家鎮護のための写経が国家事業として行われ、平安中期には末法思想の広まりによって、極楽浄土への往生を願った写経が盛んになり、紫や紺、あるいは下絵や金銀箔を散らした紙に写経し、経巻の芯である軸や収納する経箱の装飾に至るまで善美の限りを尽くした。

書写生や能書たちによって写された經典の書風は、奈良時代の厳格な写経体から、次第に和様化した温雅な書風で書写された。古筆同様、鑑賞の対象とされ、掛軸や手鑑に貼り込まれた古写経は、「経切」と呼ばれる。

展覧会関連イベント

■特別講座「尾張徳川家伝来の古筆」

講師：特任学芸顧問・名古屋経済大学特別教授 四辻秀紀
日時：2024年1月14日（日）午後1時30分～3時（午後1時開場）
会場：徳川美術館 講堂
定員：80名（公式HP <https://www.tokugawa-art-museum.jp/news/20231201102736/> より先着順にて受付中）
参加費：無料（入館料別途要）

■土曜講座「古筆鑑賞入門」

講師：学芸部マネージャー 薄田大輔
日時：2024年1月20日（土）午後1時30分～3時（午後1時開場）
会場：徳川美術館 講堂
定員：80名（事前申込制ですすでに満席 / 空席がある場合のみ当日受講可）
参加費：800円（入館料別途要）

■学芸員の見どころトーク

日時：2024年1月27日（土）午後2時～2時30分（午後1時30分開場）
会場：徳川美術館 講堂
定員：80名
参加費：無料（入館料別途要）

■体験コーナー 徳川美術館でミニ書き初め

日時：2024年1月7日（日）午前11時～午後3時
会場：徳川美術館 東ロビー
定員：100名（当日会場にて先着順）
参加費：無料（入館料別途要）

広報画像ならびに視聴者・読者プレゼント提供

企画展「うるわしの古筆」を、ぜひ御社媒体にてご紹介ください。
画像を1点以上使用してご紹介いただいた場合、視聴者・読者プレゼントとして本展覧会の御招待チケット（非売品）を、1媒体5組10名様にご提供いたします。



<下記内容をメールまたは電話、ファックスにてお知らせください 利用期間：～2023年12月15日（金）まで

>
希望画像番号

使用媒体

放送日・発売日

プレゼント提供 希望する ・ 希望しない

貴社名

ご担当者様

データ送付先アドレス

ご連絡先電話番号

[ご利用にあたっての注意事項]

- 画像のご利用は本展覧会の紹介用途のみに限ります。
- 部分アップのトリミングは可能ですが、色変更等の加工はご遠慮ください。
- 二次利用不可です。
- 画像には最低限「タイトル」と「所蔵」のクレジットを明記してください。
- 内容確認のための校正原稿をお送りください。
- ご掲載誌、DVD等を1部「徳川美術館 管理部 広報宛」でお送りください。



〒461-0023 名古屋市東区徳川町 1017

TEL : 052-935-6262 (10時～17時受付)
052-935-8222 (営業時間外受付)
FAX : 052-935-6261
担当 : 吉川・竹内
public-info@tokugawa.or.jp